教育者部門
Teacher/Academic

サスティナビリティ支援が日本と世界を結ぶ
医学教育の意味を求めて

北村　聖（きたむら　きよし）　Kiyoshi Kitamura
東京大学大学院医学系研究科附属
医学教育国際研究センター 教授
Professor of International Research Center for Medical Education, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo
推薦者　宮園 浩平　東京大学大学院医学系研究科長

1978年に東京大学医学部医学科卒業後、東京大学医学部附属病院の内科研修医として勤務。1980年に東京大学医学部第3内科入局。1982年に東京大学医学部免疫学教室の研究生になった後、渡米。1986年に帰国後、助手、講師を経て臨床検査医学助教授に就任。東京大学医学部附属病院検査部副部長と併任する。2002年から東京大学医学教育国際協力研究センターの教授として勤務し、組織変更のため、2013年に東京大学大学院医学系研究科附属医学教育国際研究センターの教授を務め、現在に至る。また、2003年より東京大学医学部附属病院総合研修センターのセンター長を併任、その後、2011年には同センターの総センター長となり、医学教育の改善に取り組んでいる。

医学生に「教える」ということを面白く感じ始めていた北村聖氏は、1997年に富士医学教育のワークショップに参加したことをきっかけに、本格的に医学教育の理論と実践を結びつけて考えるようになった。「教育とは何か?」その答えを求めていた北村氏が東京大学の医学部教育改革委員会発足時、その委員に自ら望んでなったのは当然の成り行きであった。「この委員会で東京大学医学部の教育における全般的な課題の発見と解決策を考えていく作業の先に見た方向性が、東京大学医学教育国際協力研究センターにおける医療教育活動に大きく影響していったのではないか」と北村氏は語る。

2000年に医学教育国際協力研究センターが発足した2年後、教授として赴任した北村氏が考え提案した活動は、それまで同センターでは本格的に行われていなかった「実際に現地に訪れて国際協力をすること」であった。JICA（国際協力機構）へ、2001年の戦争で廃墟と化したアフガニスタンに対し、医療支援ではなく医学教育の支援を提案。その後、調査団が結成され、実際にアフガニスタンに入り活動を開始。当時はアフガニスタン内の情報が乏しかったにも関わらず、同センターの全面的な協力を得た北村氏の提案は、現地のカブール医科大学を拠点に医学部教育の根本的改革として、教育方式を従来のロシア式教育から国際標準へ変えるなど次々と実践されていった。

同センターは、2008年にコンサルティング会社と共同で競争的資金を落札したラオスでの臨床教育プロジェクトを実施。ラオス保健科学大学と協力して、学生の臨床実習を見学型から体験型に改革。その改革は現地の病院にも浸透し、ラオスで必要とされている総合診療医、家庭医の需要に応える医療教育プロジェクトの実践に成功するなど多くの実績を残した。

北村氏の活動の真意、それはサスティナビリティ（継続性）である。それまでの日本における医療分野の国際協力は、病院建設や医療貢献が中心で、治安悪化やプロジェクトの終了に影響されることが大きいものであったが、北村氏の活動は、「日本の援助が終わった後も、あるいは政権が変わろうとも医師の教育システムは国の保健医療の向上に資するもの」という理念に基づいており、その活動は国際的にも大きく評価され、現在もインドネシアのイスラム大学医学部の整備やモンゴルでの教育病院建設にも引き継がれている。また、北村氏は海外のみでなく、日本国内においても医学教育専門家として、医学教育はもちろん看護教育にも貢献している。

「初めての国際協力がアフガニスタンであったため、国際協力の意味を深く考えさせられたと同時に、ラオスプロジェクトに参加して『幸せ』を感じた」と語る北村氏。患者さんにより近い所での教育、患者さんに寄り添う教育は北村氏の国際協力の経験に基づきながら、日本と世界を結ぶ力になっているに違いない。

■ラオス国セタティラート大学病院での回診風景

■アフガニスタン・カブール医科大学内
東京大学医学教育共同研究センターの前にて